

「土木学会映画コンクール」応募本数の推移に見る現状と今後の課題

(一財)全国建設研修センター 正会員 ○榊山 清人

(独)海技教育機構 正会員 瀧川 正一

1. 目的

土木学会の映像作品に関する「土木映画コンクール」(以下コンクールと呼ぶ)は1964(昭和39)年に第1回を開催してから2年ごとに開催されており、2016(平成28)年度の審査で第27回となった。筆者が所属する土木技術映像委員会(以下映像委員会と呼ぶ)では、コンクールの運営を支援してきている。現在の審査は、予備審査会と土木学会映画コンクール審査委員会(本審査会)の二段階で行われ、表彰については、通常総会で、企画者(及び明示されている場合には監督)には賞状、賞牌を贈る。また、同時に受賞作品の制作者に対して感謝状を贈呈し、優秀作品の上映は、一般公開や映像委員会が開催するイブニングシアターで行う。しかしながら、近年コンクールの応募本数は激減(図-1)している。

本論文では、「コンクール」作品の応募推移を分析し本数が激減した理由と今後の課題について述べる。

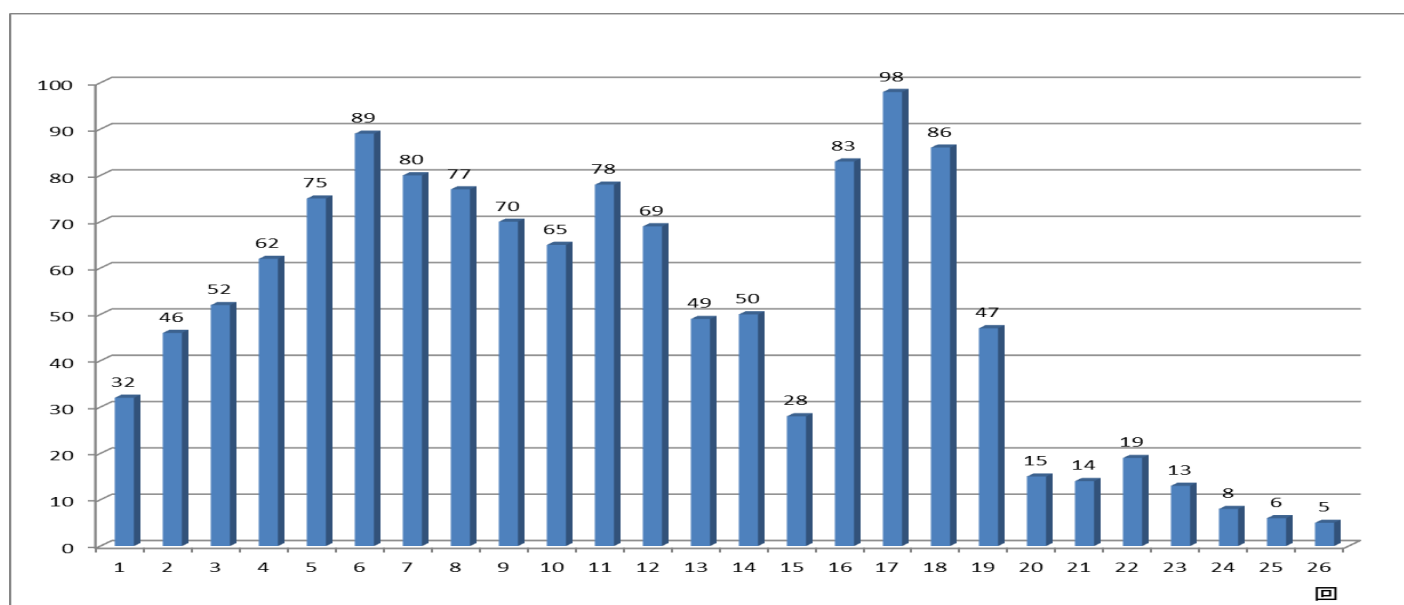


図-1 「土木学会映画コンクール」応募数の変遷

2. 映画コンクールの概要と変遷

「映画コンクール」は、土木学会会員はもとより学生も含めた広く社会一般の方々に対して、土木に関わるさまざまな事柄、すなわち、社会基盤整備や土木技術の実際、そこで活躍する人々などを、映像を通して紹介を行い、それらに対する理解を深め、あるいは感銘を与え、また関心を高めることにより、社会基盤整備に対する適切な理解、土木技術の発展、土木技術者の資質と社会的評価の向上に資する、優れた映像作品を対象としている。当初は建設省(当時)の協力のもとに国土開発映画コンクールと呼ばれ第1回は土木学会創立50周年記念行事の一環として1964(昭和39)年に開催された。1972(昭和47)年の第5回から「土木学会映画コンクール」と改称した。第5回までは全ての応募作品を予備審査していたが1974(昭和49)年第6回以降は応募作品を選定映画に限定した。1994(平成6)年第16回から「映画・ビデオコンクール」と改称し、選定制度、ビデオ作品も対象とするようになった。2004(平成14)年第21回からは、従来の選定作品のうちコンクールへの応募のあったものを審査対象としていたが一般公募も含めることとし、より広い対象からの審査を行うことになった。2006(平成16)年から名称を「土木学会映画コンクール」に改正し現在に至っている。

キーワード 映画コンクール, 土木技術映像, 応募数,

連絡先 〒187-8540 東京都小平市喜平町2-1-2 (一財)全国建設研修センター TEL 042-300-6860

3. 過去の最優秀作品

賞は上位から主に、最優秀賞、優秀賞、準優勝、佳作などがあるが、第20回は会長特別賞、第21、22回は優秀賞に変えて部門賞(一般部門、技術映像部門)などの賞も追加されている。また、最優秀賞は第16回のように選出してない場合や第24回のように2本選出している場合がある。歴代最優秀作品は表-1のとおりである。

表-1 土木学会映画コンクール 歴代最優秀賞(27回は総会前のため非公表)

回	タイトル	企画	制作
1	銀座の地下を掘る	帝都高速度交通営団	日本映画新社
2	よみがえる川	群馬県	三井プロ
3	礎(いしずえ)	東京電力	岩波映画
4	東名高速道路	日本道路公団	日本映画新社
5	松原・下荻ダム建設記録	建設省・九州地建	松崎プロ
6	関門橋	日本道路公団	RKB映画社
7	恵那山トンネル	日本道路公団	松崎プロ
8	青函トンネル-本州側工事の記録-	鹿島・熊谷・鉄建JV	鹿島映画
9	川とともに-岩木川水系改良復旧事業-	青森県土木部	日映科学映画
10	新たな挑戦-超大型泥水シールド工法-	帝都高速度交通営団	青銅プロ
11	本州四国連絡橋 長大橋の基礎を築く(第三部)	鹿島・間・五洋JV	鹿島映画
12	青函トンネル	日本鉄道建設公団青函	北海道放送映画
13	本州四国連絡橋 児島・坂出ルート	本州四国連絡橋公団	海洋架橋/山陽映画
14	海中基礎にいでむ-明石海峡大橋ケーソン設置-	本州四国連絡橋公団	海洋架橋
15	ある碑-巨大吊橋を支える-	明石海峡大橋IA下部JV	山陽映画
16	該当作品なし	-	-
17	石を架ける-石橋文化を築いた人びと	文化工房	文化工房
18	未知への旅立ち ~明石海峡大橋上部工~	本州四国連絡橋公団	海洋架橋調査会
19	ニッポン近代化遺産への旅	大成建設(株)	日本映画新社
20	地域と自然との共生をめざす道づくり ~四国横断自動車道 鳴門-板野間~	日本道路公団	大成建設(株)
21	明日をつくった男-田辺朝郎と琵琶湖疎水-	虫プロダクション	虫プロダクション 監督:牛山真一
22	民衆のために生きた土木技術者たち	大成建設(株)	(株)日映企画 監督:田部純正
23	パッテンライ!! ~南の島のものがたり	緒方英樹	同制作委員会・虫プロダクション 監督:石黒 昇
24	「アフガンに命の水を」	企画:ベシヤワール会	(株)日本電波ニュース社 監督:平山穂波
	余部橋りよう さらなる100年へ	企画:清水建設(株)	(株)キャメル
25	東日本大震災、現場の戦い	国土交通省東北地方整備局	国土交通省東北地方整備局
26	夢は世界をかけめぐる ~海外技術協力のパイオニア~	緒方英樹	虫プロダクション(株) 監督:泉 悦子
27			

作品の内容として、当然土木技術という観点から大型プロジェクトや工事記録が多いが、19回辺りから近代土木史関連した内容の作品も目立ち始めた。さらに一般公募も行われるようになるとアニメーションを取り入れた人物史等を取り上げた作品への評価が見られるようになった。

4. まとめ

応募本数の特徴として、第6回以降は選定映画に限定したため若干減少、第15回まではフィルム作品のみを対象にしていたため応募数が減少したものと考えられる。第16回以降はビデオ作品も審査対象となったため、応募数も増加している。ここまでは、審査制度の改正に関わる応募本数の減少と考察される。しかし、第19回以降からの激減は建設業界を取り巻く厳しい状況を反映したものと考えられ、特に第24回以降に至っては2桁に応募作品数が届いていない。一説には土木技術映画の製作には最低でも500~1000万円の予算が必要であると言われている。国内の土木事業の規模が縮小されてきたため、土木技術映画の製作のための予算確保は難しくなっているのが現状である。しかし、高度な技術を継承するためにも土木技術映画は大変貴重で記録を残しておく必要がある。2020年には東京オリンピックも開催される。それに向けて公共工事の拡大が予測される。今後「映画コンクール」の応募本数が増えることを期待する。

参考文献

- ・土木学会 土木技術映像委員会ホームページ: <http://committees.jsce.or.jp/avc/>